

ウィーンで活躍した才人

フランツ・シュミット

Franz Schmidt (1874–1939)

幼少の頃にピアノの神童として名を馳^はせたのち、チェロを学び、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団などでチェロ奏者としても活躍したフランツ・シュミット。その音楽的才能は作曲家、指揮者としても発揮され、教育者として後進の指導にも邁^{まいしん}進した。演奏者としてマーラーの指揮ぶりも間近に体験したフランツ・シュミットが残した交

響曲からは、当時のオーストリアの空気を伝えるような、
豊^{ほうじょう}穰で後期ロマン派的な音響が聞こえる。

A

2025
SEPTEMBER
[第2042回]

娘へのレクイエム

才能と名誉とを手にし、順風満帆にみえるフランツ・シュミットだったが、愛娘のエマが結婚して第一子を出産後に急逝してしまう。娘エマを悼んで書かれた《交響曲第4番》は、悲しく虚^{うつ}ろなトランペット独奏ではじまり、葬送行進曲を含んだレクイエムとなっている。フランツ・シュミットにとっても最後の交響曲となった。

冒頭のトランペットが印象的な
《交響曲第4番》は
娘エマの急死を悼んで書かれた
イラストレーション: ©IKE